『完成せるヨーガの環』研究（二）

立川武蔵

本編はアバヤーカラグプタ編『完成せるヨーガの環』*Niṣpannayogāvalī*（第七―十章）の和訳であるが、拙稿［『完成せるヨーガの環』第二章訳注］『愛知学院大学文学部紀要』第三十五号一二三―一二九頁および［『完成せるヨーガの環』研究（一）］『愛知学院大学文学部紀要』第三十六号一二九―一四四頁に続くものである。

テキストは、バッタチャルヤ版（[Bhattacharyya 1949] 略号：Bh）を基本とし、リー版（[Lee 2004] 略号：Lee）をも参照した。現在、二十本以上のサンスクリット写本が残されているが、それらの内、特にアーシャー・サフクティ（カトマンドゥ）所蔵No. 2-146（略号C）、ネパール国立公文書館所蔵のNo. 3/687（略号E）およびNo. 1/1113（略号G）（[Bühnemann & Tachikawa 1991] に所収）、世界宗教高等研究所（Institute for Advanced Studies of World Religions [IASWR], New York）所蔵のMMB II-224（略号：R）を参照した。他の写本に関しては［Bühnemann & Tachikawa 1991: xvii-xix］［森一九九四：一四二―一四〇］［立川一九九五：二］を参照されたい。

訳注はバックチャルヤ版を訂正した箇所など最小限に留めた。

第七章　ヴァジュラームリタ・マンダラ

1　楼閣と中尊

ヴァジュラームリタ（金剛甘露）・マンダラ[1]にあっては、〔金剛〕籠の中の法源の中央にある楼閣の内に二重蓮華があり、その芯の上の月輪の上に栄えあるヴァジュラームリタ（1）がいる。薩埵坐に坐り、〔身色は〕プリヤング樹の〔花の〕の緑色で[2]、プリヤング樹の〔花の〕緑・白・赤の中央・右・左の三面を有し、手首や腕のき

らびやかな飾りや衣によって飾られ、六臂を有し、金剛と鈴を持つ二本の臂によって自分に似た姿の智（妃）を抱く。〔残りの〕右の二手で円輪と剣を、左の二手で索と鉤を持ち、赤色の光背を有し、寂浄と恋情の「味」[3]のかたまりそのものである。

2　八方の花弁の女神

東方の花弁には白い[4]サウムヤー（2）がいる。白・青・赤の三面を有する。

南方の花弁には黄の[5]サウムヤヴァダナー（3）がいる。黄・白・赤の三面を有する。

西方の花弁には赤い[6]チャーンドリー（4）がいる。赤・青・白の三面を有する。

北方の花弁には緑の[7]シャシニー（5）がいる。緑・白・赤褐色の三面を有する。

東南の花弁には青い[8]シャシマンダラー（6）がいる。青・白・赤褐色の〔三〕面を有する。

南西の花弁にはプリヤング樹の〔花の〕緑のシャシレーカー（7）がいる。プリヤング樹の〔花の〕緑・白・赤褐色の〔三〕面を有する。

西北の花弁には青睡蓮の色のマノージュニャー（8）がいる。青・白・赤の三面を有する。

北東の花弁には金色のマノーフラーダナカリー（9）がいる。金色・白・赤の三面を有する。

これらの女神は主尊と同じく六臂であり、主尊と同様の持物を持つが、円輪の代わりに月の円輪（満月）を持つ。シャシレーカーは、〔月輪の代わりに〕一日月（朔月）を持つ。

3　第二重の女神

第二重では、北東の隅に白いプシュパー（10）がいる。白[9]・青・赤の三面を有する。

東南の隅に煙色のドゥーパー（11）がいる。煙色・白・赤褐色の三面を有する。

南西の隅に金色のディーパー（12）がいる。金色・白・青の三面を有する。

西北の隅に赤いガンダー（13）がいる。赤・青・白の三面を有する。

彼女らは順次それぞれの右の主要な手に[10]花籠、香炉、細長い灯台、香水（塗を水で溶いたもの）を入れたホラ貝を持ち、他の手では主（中尊）の持物を持つ。

東等の〔四〕方にはヴァンシャー（14）、ヴィーナー（15）、ム

クンダー(16)、ムラジャー(17)がいる。赤・黄・白・煙色の〔身〕色を有し、竹笛等の演奏に専念している。二臂と一面を有する。

4　四門の女神

東門には天空のように青いブリクティータランガー[11](18)がいる。天空の青・白・赤の三面を有する。

南門には〔白い〕バヤビーシャナー(19)がいる。白・青・赤の三面を有する。

西門には〔赤い〕ハヤルーパー(20)がいる。赤・白・青の三面を有する。

北門には〔緑の〕ガナナーヤカー(21)がいる。緑・白・赤褐色の三面を有する。

彼女らは戯れて怒ってみせ、遊戯坐に坐り、主尊の持物を持ち、〔四門衛女たちは〕順次それぞれ主要な手によって、鉤、索、棒、鈴を持ち、わずかに牙をむいている。

5　神々の姿

ここでは主尊は、五如来金剛の化仏の付いた、互いに映し合うきらめく宝石でできた冠を被る。また、主尊以外の二十尊は、ヴァジュラームリタ〔の化仏〕、肥えたカラスおよび宝石を冠に付け、月輪の上に乗り、主尊のようにきらびやかな衣と宝石と飾りを有する。プシュパー等の十二尊(10〜20)の場合には月輪の下に二重蓮華がある。

6　真言

ヴァジュラームリタの心種子は「ハハ」である。「オーン、ハハ、ヴァジュラームリタ、スヴァーハー」が心真言であるが、一切業真言でもある。

他の三種のヴァジュラームリタに関するこのような[12]観想の次第は、『ヴァジュラームリタ・タントラ』において知るべきである。[13]詳細になり過ぎるのを恐れてここには述べなかった。

第七章注

(1)『ヴァジュラームリタ・タントラ』*Vajrāmṛtatantra*(VT)(金剛甘露怛特羅)(『東北目録』四三五番 Ca. 16b, 5–27a, 7)、『台北版西蔵大蔵経』四三五番(Vol. 16, p. 382, f. 4, *l.* 5 – p. 385, f. 4, *l.* 6)は、わずか十二葉の短い経典であるが、この経典は、世尊金剛 bCom ldan rdo rje (Ca. 16b, 7–17a, 1)が女神マーマキーに対して「大楽であり、考えることもできず、尽きることもない、微細な」(Ca. 17a, 1)真理である金剛甘露を語るという形式を採っている。これ

は、シヴァ神がその妃に秘儀を語るというヒンドゥー・タントラの形式を思い起こさせる。金剛甘露とは「一切如来の身・口・意の心髄」(Ca. 16b, 6) のことであると述べられている。

このタントラ (VT) は、十一章に分かれており、マンダラのみではなく、ホーマ儀礼 (第四章、Ca. 20a, 6–21b, 6)、灌頂儀礼 (第七章、Ca. 23b–24b, 1)、死体蘇生法 (第十章、Ca. 25b, 3–26a, 6)、金剛甘露尊の観想法 (成就法) (Ca. 26a, 6–27a, 6) についても述べている。

VA で述べられるマンダラは四種であるが、『完成せるヨーガの環』(NPY) 第七章に述べられるマンダラは、VA の第一章 (Ca. 16b, 5–18a, 3) に述べられるマンダラである。他の三つのマンダラは、「ヴァジュラフーンカーラ二十九尊マンダラ」(VA, 第六章、Ca. 22b, 5–23b, 1)、「ヴァジュラくールカ二十一尊マンダラ」(VA, 第八章、Ca. 24b, 1–25a, 3)、「金剛施輪十三尊マンダラ」(VA, 第九章、Ca. 25a, 3–25b, 3) である。

これらの四つのマンダラに関しては、チャンキャ・フトゥクトゥ・ガワン・ロサンチェーデン著の NPY 注である『『完成せるヨーガの環』と『金剛の環』という二つの儀軌作法次第の解説略述』*rDzogs 'phreng dang rdor 'phreng gnyis kyi cho ga phyag len gyi rim pa lag tu blangs dbe bar dgod pa* 第二十章には、以上に述べた順でかの四マンダラそれぞれの説明がある (TTP, No. 6236 Vol. 162, p. 212, f. 5, *l.* 7–p. 216, f. 1. *l.* 2)。

VA に関しては、Vimalabhadrapāda 著『吉祥金剛甘露細疏』*Śrīvajrāmṛtapañjikā* (*dPal rdo rje bdud rtsi'i dka' 'grel*) (TTP, No. 2521, Vol. 58), Vimalabhadrapāda 著『吉祥金剛怛特羅』*Vajrāmṛtatantraṭīkā* (*rDo rje bdud rtsi'i rgyud kyi bshad pa*) (TTP, No. 2522, Vol. 58), Bhago 著『吉祥金剛甘露怛特羅大王広註』*Śrīvajrāmṛtamahātantrarājasya ṭīkā nāma* (*dPal rdo rje bdud rtsi'i rgyud gyi rgyal po chen po'i rgya cher 'grel pa zhes bya ba*) (TTP, No. 2523, Vol. 58) がある。

(2) プリヤング樹の花について、チベット訳 P (北京版二九六二番) には「プリヤングの花のような黄色がかった緑」(TTP, Vol. 80, p. 132, f. 1, *l.* 2: me tog pri yang ku lta bu ljang ser) とあり、チベット訳 P2 (北京版五〇一二三番) には「プリンヤグの花のような青みがかった緑」(TTP, Vol. 87, p. 54, f. 2, *l.* 1: me tog pri yang ku lta bu'i ljang sngon) とある。「黄色がかった緑」の「緑」と「青みがかった緑」の「緑」とが果して同一の色彩を指し示しているか否かは定かではない。今日のネパール人の間ではプリヤングの花は「グリーン」といわれている。Bh, 18, 3: priyaṅguśyāmaḥ sitarakta-; G, 18a, 1–2: priyaṅguśyāmaḥ priyaṅguśyāmasitarakta-. 今 G に従う。P も後者に従う (TTP, Vol. 80, p. 132, f. 1, *l.* 2)。

(3) 「味」については [立川 1995: 25–26] 参照。

(4) Bh, 18, 6: sitāsita- とあるが、sitā sita- とあるべきである。

(5) Bh, 18, 7: pītāpīta- とあるが、pītā pīta- とあるべきである。

(6) Bh, 18, 8: raktārakta- とあるが、raktā rakta- とあるべきである。

(7) Bh, 18, 9: haritāharita- とあるが、haritā harita- とあるべきである。

(8) Bh, 18, 10: nīlānīla- とあるが、nīlā nīla- とあるべきである。

(9) Bh, 18, 16: śuklā kṛṣṇa-; G, 18b, 3: śuklā śuklakṛṣṇna-. G に

従う。PはGに一致する（TTP, Vol. 80, p. 132, f. 2, *l.* 2: dkar mo ni zhal gsum pa dkar po dang）。

(10) 「主要な手」（pradhānakara）をPは「第一の手」の意味で理解している（TTP, Vol. 80, p. 132, f. 2, *l.* 4: g-yas kyi dang pos）。「第一の手」とは、「最も上方の右手」［立川2006: 294］なのか、「膝の上にある最も下方の手」なのか、あるいは「右あるいは左の三臂の内、中間の手」なのかは不明である。チベットにおける臂の数え方とネワールにおけるそれとは異なることに関しては［立川1987: 182–184］において述べた。ネワール人の画家ガウタム・R・ヴァジュラーチャールヤ氏は「主要な手（臂）」を第三の意味に解する（本論末のマンダラ図1参照）。

(11) Bh, 18, 24–19, 3によれば、東門に女神ブリクティータランガー、南門に男神バヤビーシャナ、西門にハヤルーパー、北門に男神ガナナーヤカがいることになる。G, 18b, 6–19a, 1; C, 25a, 5によれば、これらの四人は全て男神である。しかし、VAデルゲ版Ca. 17b, 3によればすべて女神である（Lee, p. 27, note 626）。「戯れて怒ってみせ」（Bh, 19, 4: lalitakrodhā）という表現もこの尊格たちが女神であることを窺わせる。ここではVTに従って四人をすべて女神（ブリクティータランガー、バヤビーシャナー、ハヤルーパーおよびガナナーヤカー）として訳した。本論末のマンダラ図1（ガウタム・R・ヴァジュラーチャールヤ氏描）においてもすべて女神として描かれている。

(12) Bh, 19, 11: -trayasyaivamprakāra-; E, 16b, 4; G, 19a, 5: -trayasyaiva prakāra-. 前者の読みに従う。

(13) 注(1)参照。

第八章　九尊ヘールカ四種マンダラ[1]

1　楼閣

四種の九尊ヘールカ・マンダラにあっては、金剛籠の中に法源〔があり、その中に〕楼閣がある。また「十六臂〔のヘールカ〕の場合には〔第一章の〕文殊金剛マンダラにおけるように十輻輪も存する」という第二の考え方もある。

2　十六臂ヘールカ・マンダラ

2・1　中尊十六臂ヘールカ

楼閣の中央に二重蓮華があり、その中心の上のうてなにハリ（ヴィシュヌ）、ハラ（シヴァ）、ヒラニヤガルバ[2]（ブラフマー）、プランダラ[3]（インドラ）の姿を採る四魔〔がいるが、彼ら〕の心臓の上にある日輪の上に彼〔ヘールカ（1）〕は四脚で立つ[4]。裸で、九つの〔演劇の〕味（ラサ）を伴って二脚で半伽に坐り、他の二脚で展右の姿勢で踊っている。逆立った赤褐色の髪に二重金剛が付いた冠が輝き、額の上には五つの人頭が支えなくして飾られ、五仏の〔化仏の〕冠を被っている。

〔ヘールカは〕青色〔の身体〕で、十六臂、八面を有する。それぞれの面は〔血で〕赤く丸く見開かれた三眼を有し、主要な面は

青、右〔の三〕面は白、青および青、右〔の三〕面は赤、青および青、上〔面〕は煙色でゆがんでいる。すべての面は眉毛を曲げ牙をむいて恐ろしい。

右の八手が持つ頭蓋骨杯の中に象、馬、ロバ、牛、ラクダ、人、サラバ獣[5]およびフクロウがあり、左の八手の持つ頭蓋骨杯の中に地天、水天、風天、火天、月天、日天、ヤマおよびクベーラがいる。[6]丸い耳飾り、首飾り、腰飾り、〔身体に塗る〕灰、〔切りとられた直後のため血で〕濡れている五十の人頭の環、腕飾りおよび足飾りが〔ヘールカの〕飾りである。

2・2　中尊の妃無我女

彼の妃無我女（ナイラートマー）は裸で青く、カルトリ刀と頭蓋骨杯を持つ右と左の二臂によって世尊〔ヘールカ〕を抱き、展左の姿勢で踊りつつ、五つの飾りを有し、赤く丸く見開かれた三眼と牙で恐ろしい一面を有する。赤褐色の髪は逆立って輝き、額にある五つの人頭、首から垂れる乾いた人頭の環、足飾りなどによって飾られている。

2・3　中尊の周囲の八女神

東等の〔四〕方の花弁にいるブラフマー、インドラ、ヴァシュヌおよびルドラの心臓の上にそれぞれ月輪があり、その上にガウリー等がいる。北東などの〔四維にある〕花弁にいるヤマ、クベーラ、ナイルリッティ、ヴェーマチトリンの心臓の〔上にある〕月輪の上にプッカシーたちがいる。それらの内、

ガウリー（2）は青で、右手にカルトリを、左手にローヒタ魚を持つ。

チャウリー（3）は赤で、青黒い器と豚を右と左の手に持つ。

ヴェーターリー（4）は金色で、亀と「蓮華の器」（頭蓋骨杯）を右と左に持つ。

ガスマリー（5）は緑で蛇と「頭蓋骨の容器」（ヨーガパートラ）を右と左の手で持つ。

プッカシー（6）は青で、ライオンと斧を右と左の手で持つ。

シャバリー（7）は白で、比丘と狐を右と左の手で持つ。

チャンダーリー（8）は空の青色で、円輪と鍬を蕾のような右と左の手で持つ。

ドームビー（9）は多色で、金剛と威嚇印を右と左の手に有する。

これらの八〔女神〕は半伽で踊っている。無我女のみが異なった諸特徴を備えている。ヘールカと無我女の族主は阿閦である。ガウリー等〔の四女神の族主〕はそれぞれ阿閦、ヴァイローチャナ、ラトネーシャ（宝生）、無量光であり、プッカシー等〔の四女神〕も同様である。

3　二臂のヘールカ

あるいは、二臂の主尊〔ヘーヴァジュラ〕は、右手を振り上げて金剛を持ち、左手で金剛頭蓋骨杯を持つ。カトヴァーンガを左にかかえ、無我女に抱かれている。

4　四臂のヘールカ

あるいは、四臂の主尊〔ヘーヴァジュラ〕は、〔身色が〕青で、右手に金剛を、左手に血に満たされた頭蓋骨杯を持ち、残りの二手で自らに似た金剛亥母を抱いている。

5　六臂のヘールカ

あるいは、主尊は六臂で青・白・赤の中央・右・左の三面を有し、右の二臂によって金剛とカルトリ刀、左の二臂によって三叉戟と鈴を持ち、残りの二臂によって[7]〔妃〕ヴァジュラシュリンカラーを抱いている。ヴァジュラシュリンカラーは、身色と臂〔の数〕に関しては無我女(ナイラートマー)と似ている、とアナンガヴァジュラパーダ[8]はいう。

6　ヘールカとその妃の姿

これらの二臂のヘーヴァジュラ等は、二重蓮華の芯央にある死体の心臓の上にある日輪の上に半跏の姿勢で踊りながら、阿閦の化仏を付け、二重金剛の付いた燃え立つような髪を逆立たせ、〔額は〕五つの首によって飾られ、眉を曲げ、牙をむいて恐ろしく、十六臂〔のヘールカ〕のように、円輪など[9]によって飾られ、ガウリー女神たちによって取り囲まれている。女神たちはすべて灰を〔体に〕塗っていない。ヴァジュラヴァーラーヒーとヴァジュラシュリンカラーは、阿閦の化仏を付けている。

7　真言

ヘーヴァジュラ四尊の心種子は、「フーン」である。「フーン、フーン、フーン、ファット、スヴァーハー」が心真言である。「オーン、デーヴァ(神よ)、ピチュヴァジュラ、フーン、フーン、フーン、ファット、スヴァーハー」は十六臂〔ヘールカ〕の心真言である。

「オーン、三界を降伏する者よ、フーン、フーン、フーン、ファット、スヴァーハー」は二臂の〔ヘールカの心真言〕である。「オーン、燃え立つ炎に、フーン、フーン、フーン、〔ファット、〕スヴァーハー」は四臂の〔ヘールカの心真言〕である。「オーン、キティ、キティ、ヴァジュラ(金剛よ)、フーン、フーン、フーン、ファット、スヴァーハー」は六臂の〔ヘールカの心真言〕である。

「オーン、アーハ、ヴァジュラガスマリーよ、オーン、フーン、スヴァーハー」はガスマリー[10]の一切業〔成就〕真言である。

第八章注

（1）この第八章は、（一）無我女（ナイラートマー）を妃とする十六臂のヘールカ、（二）無我女を妃とする二臂のヘールカ、（三）金剛亥母を妃とする四臂のヘールカ、および（四）ヴァジュラシュリンカラーを妃とする六臂のヘールカという四種のヘールカを挙げているが、第一のヘールカについて最も詳しく述べている。この章で述べられるマンダラの中尊は「ヘールカ」と呼ばれているが、ヘールカの一種としてのヘーヴァジュラである。

一九世紀末、チベット仏教サキャ派の分派ゴル派においてそれまでに伝えられていたマンダラの理論と実際の集大成がなされ、その成果として『タントラ部集成』*rGyud sde kun btus*（GDK）が完成し、このテキストに基いたマンダラ・コレクションも復刻された（[Tachikawa, M., Onoda, S., Noguchi, K. and Tanaka, K. 1991: 224] [Lokesh Chandra, Tachikawa, M. and Watanabe, S. 2006: 11] 参照）。GDKには一三九点のマンダラが収められているが、GDKの中でヘーヴァジュラ・マンダラはGDK, Nos. 99–105およびNo. 107である。GDK, Nos. 99–100, 104–105, 107のヘーヴァジュラは十六臂、四脚であるが、No. 107以外は四脚は半伽の姿勢を採っている。つまり、右の二脚によって立ち、左の二足は右の腿に置かれている。しかし、No. 107（rNgog Chos sku rdo rje によって伝えられたヘーヴァジュラ・マンダラの伝統）は、二脚は展右、他の二脚は半伽の姿勢を採っている。NPY第八章に最初に述べられる十六臂のヘーヴァジュラの脚はGDK, No. 107と似ている。ただ本論末のガウタム・R・ヴァジュラーチャールヤ氏の白描（図2）では、一つの右足が左の腿に向かって延びているが、GDK, No. 107では一つの左足が右の腿に向かって延びている。

GDK, No. 101のヘーヴァジュラは一面、二臂であり、No. 102では一面、四臂であり、No. 103では三面、六臂である。このようにGDKにはNPYと同様、四種のヘーヴァジュラ・マンダラが収められている。

『ヘーヴァジュラ・タントラ』のサンスクリット・テキストおよび訳については以下のものがある。D. L. Snellgrove, *The Hevajra Tantra: A Critical Study*, 2 parts, Oxford University Press, 1959; G. W. Farrow & I. Menon, *The Concealed Essence of the Hevajra Tantra*, Motilal Banarsidass, 1992.

（2）「ヒラニヤガルバ」（金胎）はブラフマーを意味する。

（3）「プランダラ」（[敵の] 町（プラ）を壊す者）とは、シヴァなどを意味することもあるが、ここではインドラを指す。

（4）ヘーヴァジュラの一本一本の足がヴィシュヌ、シヴァ、ブラフマーおよびインドラそれぞれの心臓の上にある日輪の上に置かれている。ここではヒンドゥー教の主要神を四魔のシンボルとし、それぞれを踏みつけることによって四魔（Devamāra, Maraṇamāra, Kleśamāra および Skandhamāra）を死滅させるという仏教の修行過程を語るとともに、ヒンドゥー教に対する対抗的態度をも表している。

ここでは四本の足がそれぞれ四魔のそれぞれを踏みつけていると理

解すべきであろう。ヘーヴァジュラの三本の足と妃の一本の足が四魔を踏みつけており、妃のもう一本の脚はヘーヴァジュラの腰にかかり、ヘーヴァジュラの第四の脚は半伽すなわち「地についていない」のである。

(5) サラバ (sarabha) は翼を有する伝説上の獣であるが、この獣のイメージについては、立川武蔵編『マンダラ――チベット・ネパールの仏たち――』国立民族学博物館、二〇〇三年、二三頁を参照されたい。

(6) これらの病や不幸のシンボルである八種の獣とそれらに対治するものである八人の神については、長野泰彦編『国立民族学博物館蔵青木文教師将来チベット民族資料目録』国立民族学博物館、一九八三年、二〇〜二一頁を参照されたい。

(7) Bh, 21, 9: vajrakartritriśūla-; G, 20b, 6: vajrakartri vāmābhyāṃ triśūla-; C, 27b, 4: vajrakartrī vāmābhyāṃ triśūla-. Cに従う。

(8) アナンガヴァジュラパーダは八十四成就者の一人である。彼は東ビハールおよび西ベンガルに位置したガウダ Gauda 出身であり、低カーストに属し、ヘーヴァジュラ崇拝の伝統とも関係が深いといわれる (K. Dowman, *Masters of Mahamudras*, State University of New York Press, 1985, p. 370)。

(9) Bh, 21, 14: cakryādi; E, 12a, 1: cakrādi-. Eに従う。

(10) Bh, 21, 19; G, 21a, 5: ghasmari-; C, 28a, 6; E, 18b, 4: ghasmarī-. CおよびEに従う。

第九章　マハーマーヤー・マンダラ

1　楼閣と中尊

マハーマーヤー・マンダラ[1]にあっては金剛籠の中央にある法源の中の楼閣の中心に〔マハーマーヤーがいる。〕「金剛籠の中央に楼閣がある」とある者はいう。楼閣の中央に赤い八弁蓮華があり、その芯央の上の日輪の上に「マハーマーヤー」(大幻) と呼ばれるヘールカ (1) がいる。青黒い［身で］赤の光を放ち、炎輪に囲まれ、忿怒相を有し、だいだい色の逆立った髪を輝かせ、頭蓋骨の冠を被る。青・黄・白・緑の中央・右・後・左の四面を有する。それぞれの面は赤く見開かれた三眼を有し、四臂を有する。右の二臂で頭蓋骨杯と矢を、左の二臂でカトヴァーンガと弓を持ち、六つの飾りに飾られ、人皮の衣をまとい、半伽で踊る。

赤い光を放つ栄えあるブッダ・ダーキニーは、夫［マハーマーヤー］と同じ武器を持ち、彼の首を二本の腿で抱き、赤・黄・白・緑の〔四〕面を有する。

2　四方の花弁の女神

東方の花弁には青いヴァジュラ・ダーキニー (2) がいる。青・黄・白・緑の〔四〕面を有し、〔右二手に[2]〕金剛、頭蓋骨杯、〔左二

手に[3]〕鈴、カトヴァーンガを持つ。

南方の花弁には黄のラトナ・ダーキニー（3）がいる。黄・青・白・緑の〔四〕面を有し、宝、傘、三叉戟およびジャッカルの印の付いた旗[4]を首にかけて持つ。

西方の花弁には白いパドマ・ダーキニー（4）がいる。白・黄・青・緑の〔四〕面を有し、二重蓮華、矢、頭蓋骨杯、弓[5]を持つ。

北方の花弁には緑のヴィシュヴァ・ダーキニー（5）がいる。緑・黄・白・青の〔四〕面を有し、剣、ダマル太鼓、索、頭蓋骨杯[6]を持つ。

彼女らすべては五つの飾りを付け、月輪に立ち輝いている。他の点は主尊と同じである。

3　族主

主尊〔マハーマーヤー〕の族主は阿閦である。ブッダ・ダーキニー等の〔族主〕は順次、主尊（阿閦）、阿閦、ラトネーシャ（宝生）、ヴァーギーシャ（無量光）、不空である。

世尊〔マハーマーヤー〕の心種子は「フーン」である。心〔真言〕は「オーン、フーン、フーン」である。ブッダ・ダーキニー等の〔心真言〕は「オーン、オーン、フーン、オーン、スヴァー、フーン、オーン、アーハ、フーン」である。ヴィシュヴァ・ダーキニーの一切業真言は「オーン、ハー、フーン」である。

第九章注

（1）マーヤー（幻）とは、ヒンドゥー教のヴェーダーンタ学派においてすでにシャンカラ（約八世紀）の時代に重要な概念であった。シャンカラの「不二一元論」（第二のもの〈世界〉はなく第一のもの〈ブラフマン〉のみが存するという説）では、現象世界が存在するかのように見えるのは根本原理ブラフマンの有する幻（マーヤー）の力によると考えられる。シャンカラ以前においてもヒンドゥー教においては、眼前に展開されるさまざまな現象は実在のものでなく、例えばブラフマンといった原理が人々に見せているにすぎないもの、すなわち幻であるという考え方はすでにあった。このような幻としての現象という考え方は、仏教の影響であるとも考えられる。また、後世、仏教において密教的要素が強まると、ヒンドゥー教の要素を仏教が受け取ったこともしばしばであった。このマハーマーヤー・マンダラには明らかにヒンドゥー教、特にヒンドゥーの女神崇拝の影響が見られるのである。

「マハーマーヤー」は、七世紀頃の成立と推定されるヒンドゥーの女神崇拝の聖典『女神の偉大さ』（デーヴィーマーハートミヤ）に登場する女神の名としてよく知られている。彼女はヴィシュヌの「ヨーガの睡り」であり、世界の創造者ブラフマーや破壊者シヴァをも睡らせる（立川武蔵・石黒淳・菱田邦男・島岩『ヒンドゥーの神々』せりか書房、一九八一年、一三七頁）。

『女神の偉大さ』は三つのエピソードに分かれ、マハーマーヤーが

登場するのは第一のエピソードにおいてであるが、G・ラオは『女神の偉大さ』のある版では「マハーマーヤーが大女神マハーカーリーの一つのすがたである」と述べている（G. Rao, *Elements of Hindu Iconography*, Vol. 1, part ii, Motilal Banarsidass, 1914 (rpt. 1985), p. 335)。N・K・バッタサリはラオの紹介した版の『女神の偉大さ』に登場するマハーマーヤーの彫像がダッカ博物館に収蔵されていると指摘している（Nalini Kanta Bhattasali, *Iconography of Buddhist and Brahmanical Sculptures*, Aryan Books International, New Delhi, 2001 (rpt. 1929, Dacca), PL. LXIV)。この像では、リンガから上半身を浮きあがらせた姿で表現されているが、『女神の偉大さ』に登場するマハーマーヤーが常にリンガから浮きあがる姿で表現されるか否かは定かではない。ネパールでは「マハーマーヤー」と呼ばれる女神がリンガを伴わない多臂坐像で表現されることがあるが、この女神が『女神の偉大さ』に登場するマハーマーヤーであるか否かもはっきりしない。

『女神の偉大さ』の第三のエピソードの最後に女神チャンディカー（マハーカーリー）が次のように讃えられる。「彼女はこの全世界を惑わす。この全世界を産むのは彼女である（三四）。このブラフマンの卵（全世界）は隅々まで彼女に遍満されている（三五）」（小倉泰・横地優子訳『ヒンドゥー教の聖典二篇』平凡社、二〇〇〇年、二一四頁）。

元来『女神の偉大さ』はヒンドゥー教において男神崇拝の勢力にかげりが見え始めた時代の産物である。ここでは女神ドゥルガーが男神たちの力をも凌ぐ者として描かれており、マハーマーヤーもこの大女神の一つのすがたとして登場する。

NPY第九章「マハーマーヤー・マンダラ」は、『女神の偉大さ』に登場する女神マハーマーヤーとどのように関係したかは明らかではないが何らかの関係があると思われる。

『マハーマーヤー（大幻）・タントラ』*Mahāmāyātantra*（MT）（デルゲ版四二五番、台北版十六巻四二五番）は三章に分かれる（第一章、デルゲ版Nga. 167a, 6–168b, 4, 第二章Nga. 168b, 4–169b, 2, 第三章Nga. 169b, 2–171a, 1)。第一章は、「『ヨーギニーの長である大明妃』の中の究極的な悟りの相を示す章」と呼ばれている。これは、『マハーマーヤー・タントラ』が『ヨーギニーの長である大明妃』とも呼ばれたことを示している。

このタントラの第一章第四偈（Nga. 167b, 2–3）は次のようである。すなわち「動くものと動かないもの（動物と植物、または生物と無生物）を含む梵卵（宇宙）全体に遍満している彼女は、一切の女神たちを生起させるものにして、ブラフマン等の中の偉大なる者である」（奥山直司「マハーマーヤー・タントラ――男神の形をした女神――」『インド後期密教』（下）（松長有慶編）春秋社、二〇〇六年、一二五頁）。

今引用した箇所と先に引用した『女神の偉大さ』の箇所とを比較すれば、後者が前者に影響を与えたと考えることは可能であろう。

「マハーマーヤー」という女性名詞は、NPY第九章で述べられる「マハーマーヤー・マンダラ」の主尊として登場する男尊の名称でもある。このマンダラの主尊は、かのヒンドゥー教の女神の名称で呼ばれる「男神」なのであり、ブッダ・ダーキニーを妃としている男神である。仏教タントリズムのマンダラにおいては中尊としての男尊として描かれてはいるが、この男神はむしろ「現象世界を立ちあがらせて

いる力（幻力）とその力によって形を採る素材（世界の質量因）」という両面を有する女神というべきである。

（2）MTのチベット訳（デルゲ版Nga. 170a, 1）によって補う。

（3）MTのチベット訳（デルゲ版Nga. 169b, 7）によって補う。

（4）MTのチベット訳には「南方の女神の手に、傘、三叉戟、宝、旗がある」（デルゲ版Nga. 170a, 1）とあり、右手の持物と左手の持物とを区別していない。

（5）MTのチベット訳には「西方の女神の手に、弓、矢、二重蓮華、頭蓋骨杯がある」（デルゲ版Nga. 170a, 1-2）とある。弓と矢の両方を右の二手（臂）あるいは左の二手が持つことはまずあり得ない。おそらくはNPYに述べられる始めの二点（二重蓮華と矢）が右の二手、後の二点（頭蓋骨杯と弓）とが左の二手に有ると考えるべきであろう。

（6）MTのチベット訳には「北方の女神の手に、剣、索、ダマル太鼓、頭蓋骨杯がある」（デルゲ版Nga. 170a, 2）とある。

第十章　ブッダカパーラ・マンダラ

1　楼閣と中尊

世尊ブッダカパーラ九尊のマンダラにあっては[1]、金剛籠の中の法源の内部に建てられた楼閣の内部に二重蓮華があり、その花芯の上に置かれた死体の心臓の上の日輪に妃を伴わない世尊〔ブッダカパーラ〕（1）がいる。〔身〕色等は[2]、後（第十三章）に述べる三重の輪〔の中〕にいる栄えあるブッダカパーラと同じである。

2　八方の花弁の女神たち

東・南・西・北方の蓮華の花弁に順次、チトラセーナー（2）、カーミニー（3）、パータラヴァーシニー（4）、サウバドラー（5）がいる。〔身体の〕色は青で、展左の姿勢で立ち、虎皮をまとい、右の二手にカルトリ刀と頭蓋骨杯を、左の二手にカトヴァーンガとダマル太鼓を持つ。

北東・東南・南西・西北の花弁にはシャウンディニー（6）、チャトゥルブジャー（7）、アーカーシャヴァーシニー（8）、ピータームバラー（9）がいる。黄色の光線をキラキラと放ち、展右の姿勢で立ち、それぞれ八匹の蛇王を〔頭の〕飾りとして、右の二手にカルトリ刀とダマル太鼓を持ち、左の二手にカトヴァーンガと「蓮華の器」（カパーラ）を持つ。

これらの八母神すべては日輪の上で踊り、燃えあがるような赤褐色の髪を逆立たせ、頭に五つの頭蓋骨の環を付け、五つの〔骨〕飾りによって飾られ、五十の人の生首の環を首から掛けて、わずかに牙をむき、三眼、一面、四臂である。

3　族主

世尊〔ブッダカパーラの額〕には阿閦等の五仏〔の化仏〕によって飾られている。チトラセーナー等はそれぞれ阿閦、大日、宝生、無量光〔の化仏〕によって、シャウンディー等も彼ら〔の化仏〕によって[3]飾られている。

4　神々の姿

あるいは、この世尊〔ブッダカパーラ〕および四方の女神たちは白であり、四維の女神たちは赤である。世尊は妃を伴うときも、伴わないときもある。

第十章注

(1)　ブッダカパーラを主尊とするマンダラは、NPYでは第十章および第十三章において述べられている。前者では、主尊と彼を囲む八女神によって構成されるマンダラが述べられるが、第十三章では主尊と彼を三重に囲む二十四尊とによって構成されるマンダラが述べられる。

「ブッダカパーラ」とは文字通りには仏陀の頭蓋骨杯（カパーラ）を意味するが、この名称が実際にどのような意味を有していたのかは不明である。ヒンドゥー教のシヴァ派の分派にカーパーリカ派があったことはよく知られている。この派の者たちはカパーラを常に所持し、さまざまな用途に用いたという。この派と仏教の尊格であるブッダカパーラ崇拝との間に関係があったかもしれない。

ブッダの舎利や歯に対する崇拝は仏教史において今日まで続いているが、仏教タントリストたちの中では、荼毘の後の舎利でもなく、人体から抜け落ちる可能性のある歯でなく、人骨の中でもっとも聖性の度の強い頭蓋骨を崇拝した一派がいたと考えられる。仏教タントリズムは時代が下るとともに、土着的地方的伝統を吸収していった。それらの伝統の中には、密教以前の仏教が忌避していた血の儀礼や皮の儀礼があったが、ブッダカパーラ崇拝は骨の儀礼の要素を強く持ったと考えられる。

『ブッダカパーラ・タントラ』*Buddhakapālatantra*（BT）（デルゲ版四二四番、Nga. 143a, 1–167a, 5, 台北版十六巻四二四番）は、各章の終りに述べられるように、「ヨーギニーたちの以前には［明され］なかった秘密の中の秘密」（Nga. 150a, 4: rNal 'byor ma'i gong na med pa gsang ba'i yang shin tu gsang ba）とも呼ばれる。このことからも分かるように、このタントラは母タントラに属す。

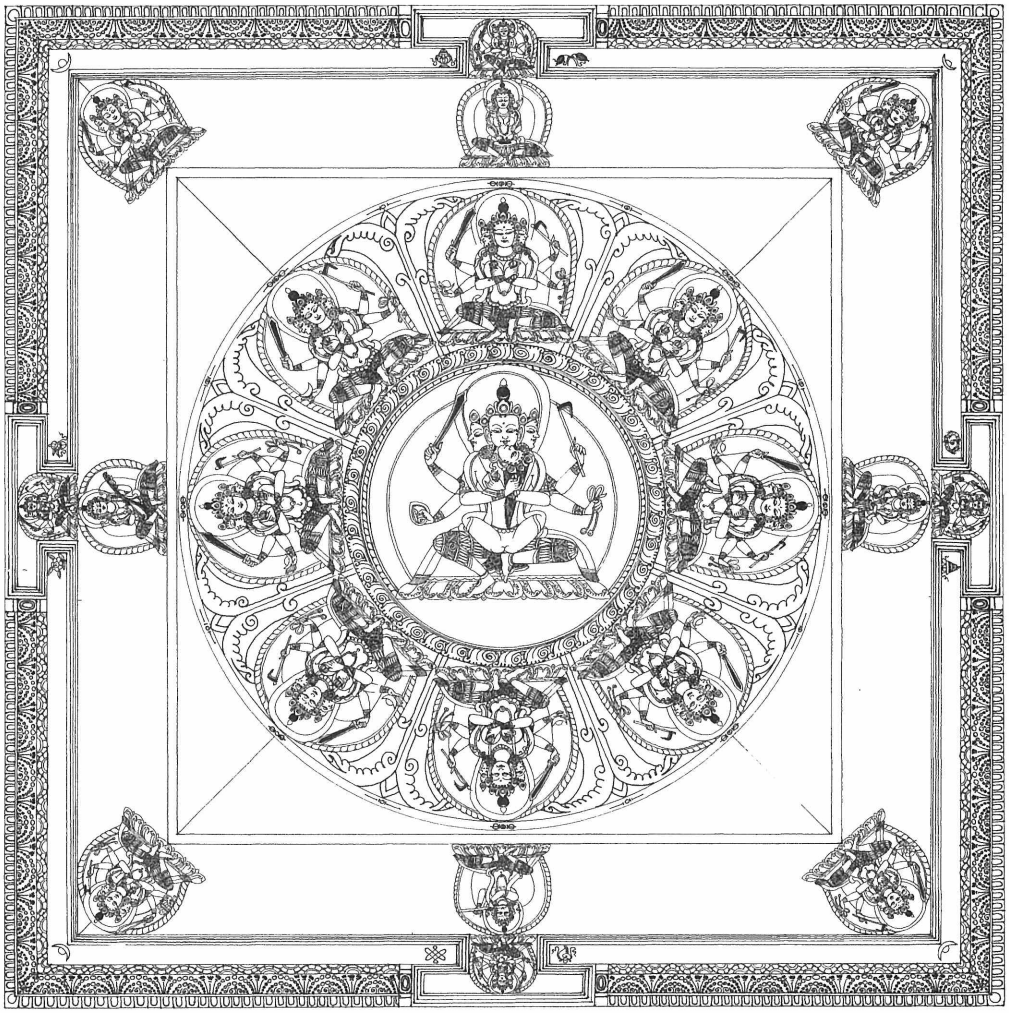
このタントラは十四章によって構成されている。第九章にはBTの行法が述べられているが、その中で、頭蓋骨杯に載せたものを食べて、どこにあっても何時でも喜びの心を保つ者は大印契（マハームドラー）つまり究極的な悟りに至ると述べられてある（Ca. 160b, 5–6）。この記述は、先に述べたカーパーリカ派との近似性を窺わせる。

また「〔『ブッダカパーラ・タントラ』の教義を〕聴くだけで飾られた大マンダラの中央において世尊のカパーラ（頭蓋骨）が裂けて究極のものが現われる」（デルゲ版、Ca. 144a, 2）とある。

NPY第十三章に述べられるブッダカパーラ・マンダラは、BT第七章（デルゲ版、Nga. 157b, 4–158b, 6）に述べられている。

（2）　Bh, 23, 3; C, 29a, 3: vajrādi-; E, 19b, 5; G, 22a, 5: varṇa-. 前者は「金剛等は」，後者は「〔身〕色等は」を意味する。ここでは後者に従う。チベット訳（P）も後者に一致する（TTP, Vol. 80, p. 133, f. 3, *ll*. 4–5: sku mdog la sogs pa）。

（3）　Bh, 23, 12–13: -amitābhāh. śauṇḍīnyādīnām apy ete.; C. 30a, 6–7; G. 22b, 5; Lee, p. 32, *l*. 7: -amitābhaiḥ. śauṇḍinyādīnām apy etaiḥ. ここでは後者に従う。



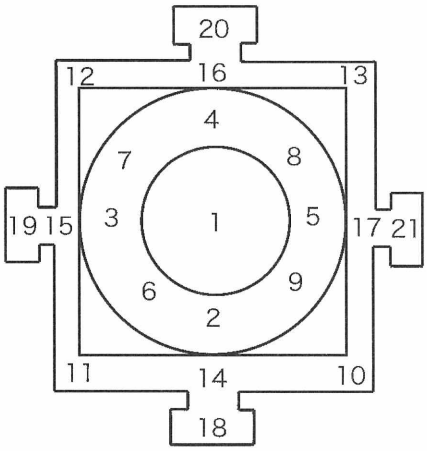


図 1
第七章　ヴァジュラームリタ・マンダラ

（以下、第十章までのマンダラ図は Gautam R. Vajracharya によって *Niṣpannayogāvalī* に基づいて描かれたものである。[Tachikawa and Ito 2006: 218–229] 参照）

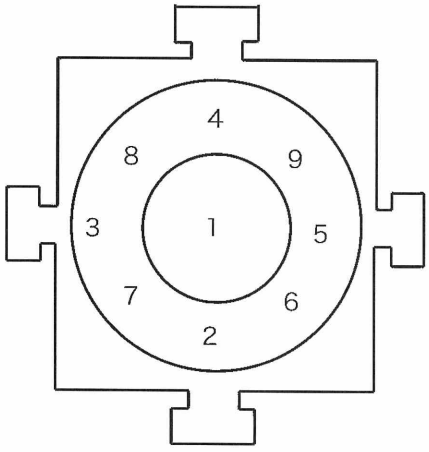
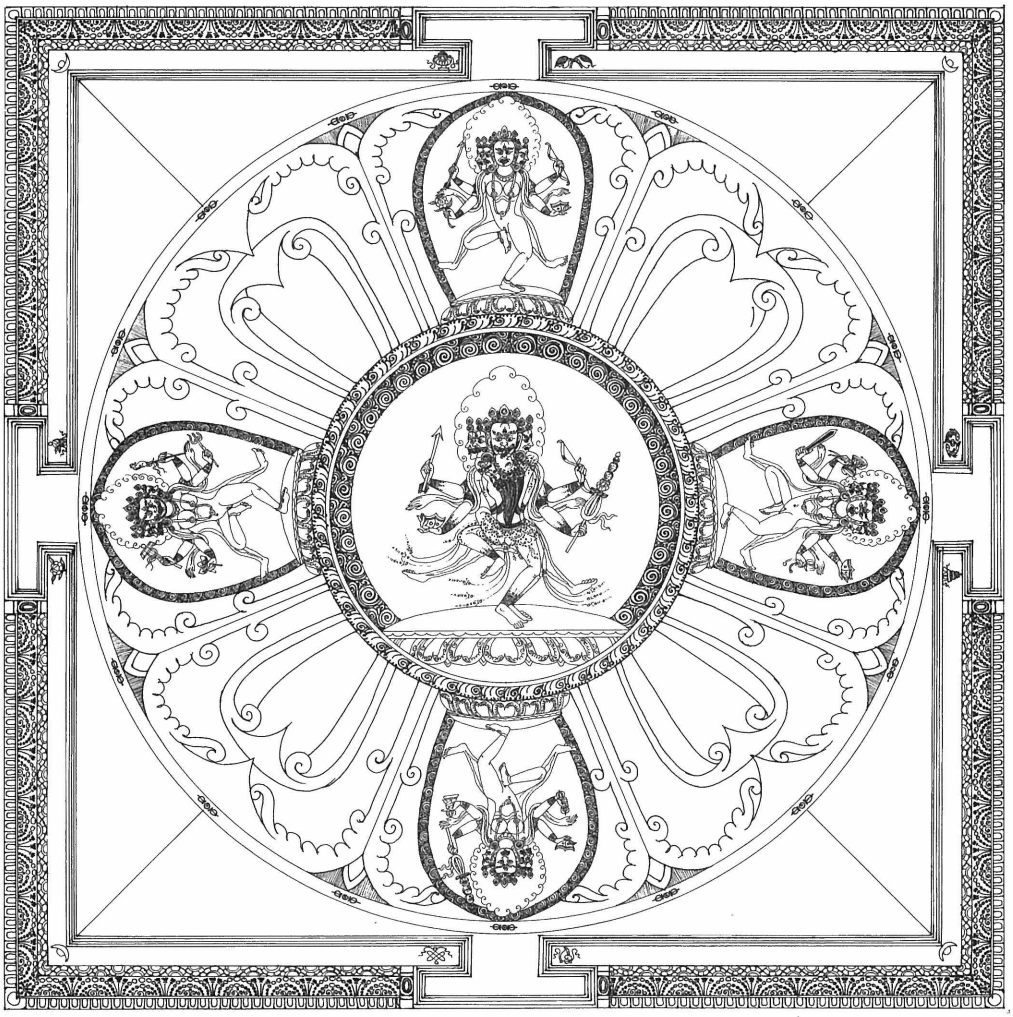


図2
第八章　九尊ヘールカ・マンダラ



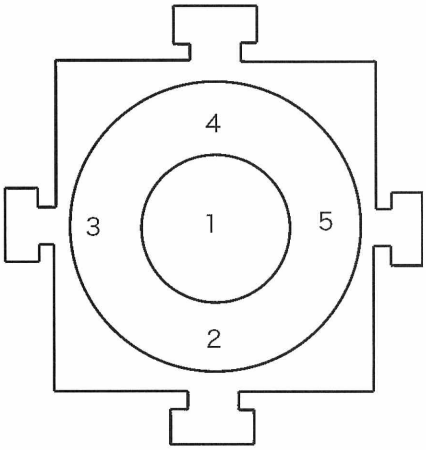


図 3
第九章　マハーマーヤー・マンダラ

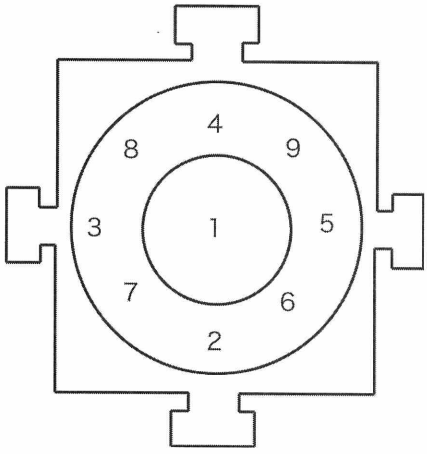


図4
第十章　ブッダカパーラ・マンダラ

略号および文献

Bh: [Bhattacharyya 1949]

BT: *Buddhakapālatantra*

C: *Niṣpannayogāvalī Mss*, Asha Archives, Kathmandu, No. 2-146.

D: Tibetan Tripitaka, the sDe dge edition, No. 3141.

E: *Niṣpannayogāvalī Mss*, National Archives, Kathmandu, No. 1/1113.

G: *Niṣpannayogāvalī Mss*, National Archives, Kathmandu, No. 3/687.

GDK: *rGyud sde kun btus.*

Lee: [Lee 2004]

MT: Mahāmāyātantra.

N: Tibetan Tripiṭaka, the sNar thang edition, No. 1557.

NPY: Niṣpannayogāvalī.

P: Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition, Suzuki Foundation, No. 3962.

P2: Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition, Suzuki Foundation, No. 5032.

R: *Maṇḍalāvalī Mss,* The Institute for Advanced Studies of World Religions, New York, No. MBB II-244.

TTP: Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition, Suzuki Foundation.

VT: Vajrāmṛtatantra.

Bhattacharyya, B., *Niṣpannayogāvalī, Gaekwad's Oriental Series No. 109*, Oriental Institute, 1949.

Bühenmann G. and Tachikawa M., *Niṣpannayogāvalī, Two Sanskrit Manuscripts from Nepal*, The Centre for East Asian Cultural Studies, 1991.

Lee, Yong-hyun, The *Niṣpannayogāvalī by Abhayākaragupta*, Baegun Press, Seoul, 2004.

Lokesh Chandra, Tachikawa M. and Watanabe S., *A Ngor Maṇḍala Collection*, Mandala Institute, Nagoya & Vajra Publications, Kathmandu, 2006.

Raghu Vira and Lokesh Chandra, Tibetan Maṇḍalas (*Vajrāvalī and Tantrasamuccaya*), ŚATA-PIṬAKA SERIES, Indo-Asian Literatures Volume 383, International Academy of Indian Culture, New Delhi, 1995.

Tachikawa, M. and Ito, M. (Compiled), Buddhist Maṇḍala Deities—A Study of the *Niṣpannayogāvalī*—『ヒマーラヤ地域における仏教タントリズムの基層に関する研究』平成十四年度～十七年度科学研究費補助金（基礎研究B）研究成果報告書（研究代表者　立川武蔵）二〇〇六年。

立川武蔵「『完成せるヨーガの環』第十九章「金剛界のマンダラ」訳注」『密教図像』一四号、一九九五年、一一三三頁。

立川武蔵「『完成せるヨーガの環』第二章訳注——『ピンディークラマ』（略次第）に述べられた阿閦マンダラ——」『愛知学院大学文学部紀要』第三十五号、二〇〇五年、一一三一一一九頁。

立川武蔵「『完成せるヨーガの環』研究（一）」『愛知学院大学文学部紀要』第三十六号、二〇〇六年、一一九一一四頁。

松長有慶（編）『インド後記密教［下］』春秋社、二〇〇六年。

森雅秀「『完成せるヨーガの環』第一章「文殊金剛マンダラ」訳およびテキスト」『高野山大学密教文化研究所紀要』第七号、一九九四年、一四二―一一三頁。
森雅秀「『ヴァジュラーヴァリー』所説のマンダラ――尊名リストおよび配置図――」『高野山大学密教文化研究所紀要』第十四号、二〇〇一年、三〇八―一九二頁。